

演題名	オーチャードグラスの最終刈取り時期が再生と養分の貯蔵に及ぼす影響		
発表者氏名	有野 陽子	所属	畜産試験場
<p>1 目的</p> <p>オーチャードグラス等の寒地型イネ科牧草は、気温が低下し日が短くなると、茎葉の成長がしだいに鈍化して、根が肥大し、越冬の準備に入る。この時期において生育がまだ続いている気温下で牧草を刈取ると、越冬に必要な栄養分を年内の再生にも使ってしまうため、翌春の生産量に悪影響を及ぼす。北海道や岩手県の報告ではこの期間を指して刈取り危険帯としているが、長野県における刈取り危険帯がいつであるかは明らかではない。そこで、気温の異なる時期にオーチャードグラスの最終刈取りを行い、その後の再生と貯蔵養分に及ぼす影響について検討した。</p> <p>2 材料及び方法</p> <p>試験は、2023 年秋～2024 年春に長野県畜産試験場（標高 760m）の造成 5 年目のオーチャードグラス（品種名：アキミドリⅡ）小規模試験圃場にて実施した。最終刈取り時期を 2023 年 9 月上旬、10 月上旬、11 月上旬の 3 時期に区分（以下 9 月区、10 月区、11 月区）して草丈と収量（刈取り高さ 10cm）の調査を行った。同時に 0.5m×0.5m の枠内の茎数及び地上部の現存量を地上 0～10cm（茎基部^{けいきぶ}）、10cm 以上（茎葉部^{けいようぶ}）に分けて調査した。最終刈取りの 4 週後の再生草についても同様に現存量の調査を行った。翌 2024 年の 1 番草について区ごとに草丈と収量の調査を行った。得られたサンプルについて、改変アンスロン法を用いて貯蔵養分である水溶性炭水化物（以下 WSC）の含量を求めた。2023 年の最終刈取り後の施肥と翌 2024 年の春先の施肥は行わなかった。</p> <p>3 結果</p> <p>2023 年は 9 月上旬と 11 月上旬に平均気温が平年値より高かった。11 月区では平均気温が生育適温に近かったためか、乾物収量が 10 月区より多かった。</p> <p>（1）最終刈取り時期が再生に及ぼす影響について</p> <p>地上部の乾物現存量に占める茎基部及び茎葉部の割合は、9 月区、10 月区、11 月区とも茎基部約 60%、茎葉部約 40% と同じであった。しかし、各区刈取り 4 週後の再生草では、各区とも茎基部の割合が多くなり、特に 10 月区と 11 月区では茎基部の割合が 80% 以上を占めた。翌 2024 年の 1 番草の草丈と乾物収量の値は 11 月区で 9 月区、10 月区より小さく、再生に悪影響を及ぼした。</p> <p>（2）最終刈取り時期が貯蔵養分に及ぼす影響について</p> <p>WSC 含量は 9、10、11 月区とも茎基部の方が茎葉部より多かった。再生草については、9 月区では茎葉部の WSC 含量の方が多くなった。10 月区は茎基部、茎葉部ともほぼ同じで、11 月区では全体の WSC 含量が増大し、茎基部の方が茎葉部より多かった。翌 2024 年の 1 番草については WSC の含量に差はみられなかった。これらの結果から県内準高冷地におけるオーチャードグラスの刈取り危険帯は 10 月中旬～11 月上旬、最終刈取りの限度は 10 月上旬であると推察された。</p>			